

ディカーニカ近郷夜話 前篇

VECHERA NA HUTORE BLIZ DIKANIKI

紛失した国書（×××寺の役僧が語った実話）

青空文庫

ぢやあ、もつとわしの祖父の話を聴かせると仰つしやるんで？
——よろしいとも、お伽になることなら、なんの、否むどころでは
ありませんよ。ああ、何ごとも昔のこと、昔のこと！ 遠い遠
い、年代や月日のほども睨とはわかりかねる大昔にこの世にあつ
た話を聴く時の、嬉しさ娛しさといつたら！ ましてやそれが、
祖父とか曾祖父といつた自分の身内の者の登場してくる話でも
あらうものなら、それこそ——自分が曾祖父の魂のなかへ潜りこ
むか、それとも曾祖父の霊が自分の中へ忍び入るかして、まるで
自分自身に経験したことのやうな思ひがされるものぢやて。それ
が嘘だつたら、大殉教者ワルワーラ尼の讃仰歌を唱へるとき、わ

しが窒息してしまふやうに手を振つて呪禁まじなつて下すつてもよい：

：。いや、わしには何より娘つ子や新造が苦手なんでしてな、あの手合に見つかつたが最期、『フオマ・グリゴリエキツチ！

フオマ・グリゴリエキツチ！ ようつてば、なんか怖いお話を
して下さいつたら？ ようつてば！ ようつてば！……』つてん

で、ねだること、ねだること……。決して聴かせるのを吝むわけ
ではないが、晩に寢床へ入つてからあの連中がいつたいどんなこ

とになるかを考へて頂きたい。どれもこれも蒲団の下でまるで瘡おこり
でもわづらつてをるかのやうにガタガタ震へて、まだその上に、

自分の毛皮外套のなかへ頭を突つこみかねないことを、ちやんと
わしは知つてゐるのぢや。鼠が壺をバリバリ引つ搔くとか、自身

で火搔棒につまづくとかすると——さあ大変だ！　魂は踵のなかへ飛びこんでしまふのぢや。ところが、あくる日になると、もうけろりとして、又してもうるさく付き纏つて来る。そこでまた改めて何か怖ろしい話をして聴かせるより他に手はないといふことになるのぢや。それは扱て、あなた方にはどんな話をお聴かせしたものかな？　どうも、おいそれとは頭へ浮かんで来ませんぢやて……。おお、さうぢや、今は亡きわしの祖父が妖ウエーヂマ女と＊

ドウラチキ阿房　の勝負をやらかした話を一つ聴かせませう。ただし、前もつてお断わりしておきますが、どうか、途中で話の腰を折らないやうにお願いいたしたい。でないと、とんでもない不味まづいものが出来あがつてしまひますからな。さて、亡きわしの祖父は、

その頃の普通なみの哥薩克とは、てんで異ちがつてをりました。彼はスラブ語の綴りから、正教会用語の略語標の置き方まで、ちやんと心得てゐたものぢや。祭日に使徒行伝でも読ませようものなら、今どきのそんじよそいらの祭司の息子などは裸足で逃げ出してしまふくらゐ。御承知の通りその頃といへば、*バトウーリンぢゆうから読み書きの出来る手合をすっかり狩り集めて来たところで、帽子でと言ひたいところだが、なんの、片手で残らず掬ひとつてしまふことが出来たくらゐなんぞな。それだから、祖父に出あふと誰彼の別なく慇懃に挨拶をしたのも至極尤もな話ぢやて。

ドウールニヤ
ドウラチキ

阿房 『馬鹿』ともいふ、骨牌戯の一種。

バトウーリン チエルニゴフ県コノトープ郡下の小都会

で、往時、ゲトマン 総帥の居住したところ。

さて或る時のこと、*ゲトマン 大総帥が何事か国書をもつて女帝の闕下へ奏上しようと思ひ立つたのぢや。そこで当時の聯隊書記で——さあ困つたぞ、なんとかいふ名前ぢやつたて……ユスクリヤークでもなし、モトウーゾチカでもなし、ゴロプツエクでもなし……なんでも、そのしちむつかしい名前は、はなから変てこな音ではじまつてゐたことだけは知つてをるが——その聯隊書記が祖父を呼びつけて、大総帥から女帝陛下への国書捧呈の使者として、彼が任命されたことを伝達したのぢや。祖父は元來、仕度に手間どることが大嫌ひぢやつたから、早速その上書を帽子の裏へ縫ひこんで、馬を曳つぱり出すと、女房とそれから、祖父自身の呼び方

に従へば、二匹の仔豚——その中の一匹がかくいふやつがれの生みの親父であつた筈なのぢやが——に接吻しておいて、まるで五十人からの若者が往来の真中で*九柱カクシヤ戯でもおつぱじめたかと思はれるやうな、おつそろしい土けぶりを蹴立てて出発したものでや。で、翌る朝の、まだ四番鶏も唄はぬ未明に、祖父はもう*コノトープへ差しかかつてをつた。ちやうどその時にはヤールマルカ定期市が立つてゐて、往来といふ往来には目も眩むほど人群だかりがしてゐたが、しかしまだ早朝のこととて、何れも地べたに寝はだかつて夢路を辿つてゐた。一匹の牝牛のそばにはうそ鷺のやうに真赤な鼻の、放埒な若者が寝そべつてゐた。そのむかうには、磁石や、藍玉や、散弾や、ブーブ里克輪麵麩キといった品々を持つた女商人がグウグウ鼾をか

いてゐた。馬車の下にはジプシイが横たはつてをり、魚を積んだ車のうへには車力が寝てゐた。帯や手てぶくろ套を持つた髭もぢやの大露西亞人が道の真中に両脚を投げ出してゐた……。どれもこれもヤールマルカ定期市にはつきものの賤しい小商人どもばかりぢや。祖父はちよつと立ちどまつて、しげしげと眺めたものぢや。さうかうするうちに、天幕の中がおひおひざわつきだしてな、猶太人の女どもが水筒をガチャガチャいはせはじめ、そこから煙の輪がたちのぼつて、温たかい揚饅頭の匂ひが野営ちゆうに漂ひ流れた。祖父はふと、うちがね燧鉄も煙草も用意をせずに出かけて来たことを思ひ出して、市場の中をぶらぶら歩き出した。ところが、ものの二十歩も進んだかと思ふと、ぼつたりザポロージエ人に出会つた。放

埒な遊び人であることはその顔を見れば一目で分る！ 燃えるや

うな緋のシヤロワールイ寛袴に*ジユパーンをまとひ、派手な花模様の帯

をしめて、腰にはサーベル長劔と、踵までもとどく銅の鎖の先につけた

パイプ煙管を吊つてゐる——てつきり、ザポロージエ人なのぢや！ ザ

ポロージエ人といへば、実に素晴らしいものでな！ 立ちあがつ

てシヤンとからだ軀を伸ばすと、雄々しい口髭を捻つて、靴の踵そこがね鉄の

音も勇ましく踊りだしたものぢや！ そのまた踊り方といつたら、

両脚がまるで、女の手に されつむ緘む錘むそつくりで、旋風のやうな

迅さでバンドウーラのいと絃を搔き鳴らすかと思ふと、直ぐさまその

手を腰につがへて、しやがみ踊りに移る、歌をうたふ——心もそ

ぞろに浮き立つばかりぢや……ところが今ではもう時勢が變つて、

さうしたザポロージェ人の姿も滅多には見られなくなつたが、それはさて、偶然に落ち合つた二人は、一と言二と言ことばを交はしただけで、もう十年の知己のやうに親しくなつてしまつたのぢや。次ぎつぎと矢鱈に話はずんだものだから、祖父はすつかり自分の旅の用向きも忘れてしまつてな、二人は早速、大精進期前の婚礼そのこのけの、飲めや唄への大酒宴をおつぱじめたものぢや。だが、たうとう終ひには、壺を叩きわつたり、人だかりの中へ錢ぜにをばら撒いたりすることにも、退屈するのは当然で、それに定ヤ期市ールマルカがいつまで立つてゐるものでもなし。そこで、この新らしい友達同士はさきぎき別れ別れになることを惜んで、道中を共にすることにしたのぢや。彼等が相携へて野中の道にさしかかつた

のは、もう遠に夕暮ちかい頃だつた。陽は沈んで、その代り空のところどころに赤味を帯びた夕ゆふやけ映の条が輝しまやいてゐた。野づらには、ちやうど眉の黒い粹いきな新造が著る晴著の下着プラフタの縞柄みたいに、畠がつらなつてゐた。さて、件くだんのザポロージエ人だが、これが恐ろしく口軽に喋りまくるので、祖父と、それからもうひとり同行に加はつてゐた呑み仲間とは、もしやこの男には悪魔が乗りうつつてゐるのではないかしらと怪しんだくらゐだつた。いつたい、どこで修業して来たものか、その話があまりにも珍妙なため、祖父は何度となく、可笑しさに腸はらわたのよれるのを、脇腹を押へてこらへなければならなかつた。だが、先へ進むに従つて野原がだんだん暗くなると、それにつれて、この達者な饒舌家のはなし

が、ひどく支離滅裂になつて来た。たうとうしまひには、すつかり口を噤んでしまつて、このわれわれの話し手は、ほんの些細な物音にも、妙にビクビクするやうになつた。

ゲトマン
総帥

小露西亜カザツク軍の最高の首領で、カザツク

の中から選ばれてその任に就いたもの。総帥選挙制は、一五九〇年に始まり、一七六四年にエカテリーナ二世に依つて禁止されるまで継続した。

カーシヤ
九柱戯 ホツケーまたはクロツケツトに類する運動競技の一種。

コノトープ チェルニゴフ県コノトープ郡の首都。

ジュパーン 波蘭から伝はつた長上衣の一種で、ウクラ

イナ人、殊にカザツクの晴著として用ゐられたもの。

「おやおや、兄弟！ 冗談でなしにまぶた瞼が重くなつたと見えるな。

もうそろそろ我が家へ帰つてペチカ煖炉の上へ這ひあがりたくなつたの

ぢやらう！」

「あんた方には、何も包み匿しすることはない。」さういつて、不意にその男は振りかへりざま、二人の顔をじつと見つめたものだ。「実はわしの魂はとつくの昔に悪魔に売りわたしてあるのぢやよ。」

「これは奇態なことを聞くもんどぢや！ 生涯に一度も、悪魔に関りあはんやうな者があるかしらん？ さういふ時にやあ、よく言ふやうに羽目をはづした底抜け騒ぎをするに限るのさ。」

「それがさ、御兩人！ 羽目をはづして騒ぎもしようが、その、今夜が、悪魔と約束した期限なんでね！ ねえ、おい、兄弟！」と、彼は二人の手をたたいて言つた。「お願いだ、どうか、おいらを渡さないで呉れ！ 今夜ひと晩だけ眠らないで、張り番をして呉れないか！ 生涯、恩に著るだよ！」

どうして、そのやうな不仕合せな人間を助けずにおかれよう？ 祖父は、万に一つでも自分の基督教徒としての魂を悪魔の鼻チュープづらに嗅がせるやうなことがあつたなら、この脳天の*房チュープ髪を斬り取られても文句はないと、きつぱり言ひ放つた。

房チュープ髪

脳天に剃り残した一つまみの房毛で、カザツク

の標章としたもの。

哥薩克の一行はもつと先きへ進む筈であつたが、空が一面に黒い幕でも蔽はれたやうな真暗な夜となり、野原はまるで羊皮の外套でも頭からすつぽり被せられたやうな真の闇に塞かれてしまつた。やつと遠くの方に一つ小さな灯影がかすかに見え出すと、馬どもは畜舎の近づいたのを感じてか、耳を立てて暗やみに眼を睜りながら道を急ぎだした。灯影が一行を迎へにこちらへ近づいて来るやうにさへ思はれた。やがて哥薩克たちの眼前に一軒の酒場が現はれたが、それはまるで、招ばれて行つた賑やかな洗礼祝ひから戻らうとしてゐる百姓女の恰好よろしく、今にも一方へ倒れさうになつてゐた。その時分の酒場と来ては、今どきのそれとは、てんで較べものにもなんにもなつたものぢやない。この

うと手足を伸ばしたり、*ゴルリツツアやゴパックを踊るなどといふ訳にいかなかつたのは勿論のこと、頭へ酔がのぼつて、足が自然に手習ひをしはじめても、横になつて休む場所もないといふ始末だつた。内庭は荷馬車が一杯で、立錐の余地もなく、納屋のわきや、秣まぐさをけ槽まぐさをけのなかや、玄関などには、からだをくの字型に曲げたり、ふんぞり返つたりした、いぎたない連中が、まるでうはぼみ蟻のやうな大麩をかいてゐた。ひとり酒場の亭主だけはカガニエツツ油燈めじるしの前で、荷馬車ひきどもが酒を何升何合飲み乾したかといふ目標を棒切れに刻みつけてゐた。祖父は三人前として二升ばかり酒を注文して、納屋へ陣取つたものだ。三人は並んで、ごろりと横になつた。祖父がふと振りかへつて見ると、二人の仲間はまだ死ん

だやうにぐつすり寐こんである。祖父はいつしよに泊つた、くだんのもう一人の哥薩克を起して、さつきザポロージエ人と約束したことを思ひ出させた。その男は半身を起して眼を擦こすつただけで再び寐こんでしまった。どうも仕方がない。一人きりで見張りをしなければならぬことになつた。どうかして眠氣を払ひのけようものと、祖父は荷馬車を片つぱしから残らず見て まあいさと、彼は考へた。どうも仕方がない、徒歩で出かけることにしよう。ひよつと途中で定期市ヤールマルカがへりの博労にでも出会つたら、また、なんとかして馬を買ふことぢや。で、彼は帽子をかぶらうとしたが、その帽子が見当らぬ。考へて見ると、昨日あのザポロージエ人と、ちよつと帽子の取り換へつこをしたままにな

つてゐたのだ。祖父は、ぢだんだ踏んで口惜しがった。何から何まで悪魔の手にしてやられてしまったのだ！ ほしい大総帥ゲトマンからの恩賞も水の泡だ！ 女帝への上書が飛んでもないものの手に渡つてしまつたのだ！ ここで祖父はくそみそに悪魔を罵つたから、さぞかし、悪魔の奴、地獄で何度もくそ噓めをしたことだらう。だが、いくら悪態をついてみたところで今更なんの役に立つ筈もなく、祖父が何べんうなじ項を搔いても好い分別は浮かばなかつた。はて、どうしたものだらう？ そこで結局、他人の智慧を借りることにした。ちやうどそのとき酒場にあるあはせた、堅気な人たちや、馬車ひきや、ちよつと立ち寄つただけの客などを集めて、かくかくの次第でまことに困つたことが出しゆつたい来してしまつたと、一部

始終を打ち明けた。馬車ひきどもは棒を頤杖について、しきりに首を傾げながら長いあひだ考へてゐたが、この基督教国で大総帥ゲトマンからの上書を悪魔がかつ浚つて行つたなどといふ面妖な話は、つひぞこれまで聞いたこともないと言つた。他の連中はまた、悪魔と大露西亞人モスカリーにかつぱらはれたものは決して二度と再び手に戻る事がなかつけ加へた。ただひとり酒場の亭主だけは、なんにも言わずに部屋の隅に坐つてゐた。祖父はそこで亭主の方へ近寄つた。総じて人が口を噤んでゐるのは、いい分別を持つてゐる証拠だ。ただ、この亭主はあまり口の軽い方でなかつたから、祖父が五留金貨ルーブリを一つ衣囊かくしからつまみ出さなかつたものなら、彼はなんの得るところもなく、いつまでも亭主の前に棒だちに立ちつく

したに過ぎなかつたらう。

ゴルリツツア 小露西亜の代表的な舞踊の一種。

「それぢやあ、その上書をどうして見つけたものか、ひとつお前さんに教へて進ぜやんせう。」と、亭主は祖父を傍らへ呼んで言った。祖父はほつと胸をなでおろした。「わつしは、一と目でお前さんが歴乎とした哥薩克で、決して意気地なしでねえことを見抜きましたわい。そうら見なされ！ この酒場からほんの僅かゆくと、道が右手へをれて森の中へ入つてをる。野原がうつすら暗くなる頃、仕度をととのへて出かけなさるのぢや。あの森の中にはジプシイが住んでをつて、ウエーヂマ妖女が火搔棒に跨がつて空を翔けまはるやうな晩に限つて、あな巢窟から出てきて、鉄を煉うつのぢや。

だが、そのジプシイ共が實際どんな生しやうばい業いをしてをるのか、そんなことは知らなくともよい。森の中でやたらにトンカントンカんと音がする筈ぢやが、その音の聞えて来る方角へは行かぬことぢや。そのうちに焼け残りの立木のそばを過ぎよる小径へひよつこり出るから、その小径についてずんずん先きへゆきなされ……。さうすると、やたらに茨とげの棘とげがひつかかり出して、道は深い榛はしばみの叢みの中へはいるが、それでもかまはず、さきへさきへと行かつしやれ。すると小さな小川の縁へ出るだから、そこで初めて足をとめなさるのぢや。用のある相手にそこで会はつしやるぢやらう。それから衣囊かくしの中から、そもそも衣囊かくしといふものが作られてをる由緒いはれの本尊仏を取り出すことを忘れなさるなよ……。その

お宝といふやつを好くことには、悪魔も人間もとんと変りがないのぢやから。」これだけ言つておいて、酒場の亭主は帳場の中へ入つてしまふと、もうそれ以上は一と言も口をきかなかつた。

祖父は胆つ玉の小さい十把一繋げの人間ではなかつた。或る時など、狼に出喰はすと、いきなりその尻尾を掴んで、生捕にしたものぢや。また哥薩克の群がる中を彼が拳しを振りまはしながら通ると、一同はまるで梨の實のやうに大地へ叩き伏せられてしまつたものぢや。とはいふものの、夜が更けて、いよいよその森の中へ足を踏みこんだ時には、さすがの祖父も肌寒い思ひがしたさうぢや。空には星影一つ見えなかつた。まるで酒^{さかぐら}窖の中のやうに真暗で、物の文目あやめも分らなかつた。ただ頭上はるかの梢を吹き

渡る冷たい夜風の音が聞えるばかりで、樹々はあたかも酔ひしれた哥薩克の頭のやうに、だらしなく揺れながら、管を巻くやうな葉ずれの音を立ててゐる……。不意にぞうつとするやうな寒けがして、祖父は思はず羊皮の外套を心に浮かべたさうぢやが、そのとき突然、まるで掛矢の百挺も打ちおろしたかと思はれるやうな凄い物音が森ぢゆうに響き渡つて、頭の中がガンと鳴り出したほどぢやつたといふ。それと同時に一瞬、雷いなづま光のやうに森中がパツと照らし出されたのぢや。咄嗟に祖父は細い灌木のあひだを縫ふやうに走つてゐる小径を見てとつた。それから焼け残つた立木もあり、茨の叢やぶもある！ 聴かされたとほり寸分の違ひもない。なるほど酒場の亭主め嘘はつかなかつたわい。だが、刺のあるく

さむらを押し分けて通り抜けるのは、なかなか楽な仕事ではなかつた。なんともはや、こんなに痛く手足をひつかく刺や枝といふものには生まれて初めてお目にかかる次第で。殆んど一と足ごとに祖父は悲鳴をあげたものぢや。しかし先きへ進むにつれて、だんだんあたりがひらけ、木立が疎らになつて、これまで祖父が波ポーランドーランドの彼方むかふでも、つひぞ見たことのないやうな、恐ろしくひろびろとしたところへ出た。木立のあひだから、まるで磨ぎすました鋼鉄のやうな、黒々とした小川の流れが見える。祖父はあたりを見まはしながら、しばらくその岸に立ちつくした。むかふ岸に火が燃えてゐる。それが今にも消えさうに見えるかと思ふと、またパツと燃えたつて、哥薩克の手に捉まへられた波蘭の貴族のや

うにブルブル顫へてゐる川の波に反映するのだ。おや橋がある！

さあ、ここを渡るのは悪魔の乗つた二輪馬車より他ほかにはある

まいて。だが、祖父は大胆にも歩を進めた。そして、人が一服

やらうとして嗅煙草入を取り出すのよりてつとり早く、むかふ岸

へ渡つてゐた。見れば焚火をかこんであるの是一群れの妖怪で、

そのみつともいい御面相といつたら、これが他ほかの場合だつたら、

何を犠牲にしたつて、こんな化物とちかづきになるのは真平だつ

たらう。しかし、今は是が非でもわたりをつけなくちやならない。

そこで祖父は、妖怪どもに向つて馬鹿丁寧丁寧に腰をかがめて、『今

晩は、皆の衆！』と挨拶をした。ところが、会釈ひとつ返す奴で

もあらうことか、黙りこくつて坐つたまま、何かしら怪しげなも

のを、しきりに火の中へふり撒いてばかりゐくさる。一つ空いてる場所があつたので、祖父は遠慮会釈なしにそこへ坐りこんだ。だが、その御面相の綺麗な妖怪どもは、依然として黙りこくつてゐる。祖父も何ひとこと言はぬ。一同は長いあひだ、無言のままに坐りとほした。祖父はもうそろそろ退屈になつてしまつた。そこで衣か囊くしをまさぐつて煙管を取り出しながら、あたりを一とわたり見まはしたが、どいつ一匹こちらに注意をしてゐる奴もない。『さてなんぢや、皆の衆、甚だもつて申しかねることぢやが、その、いはばなんぢやて、（祖父は酸いも甘いも噛みわけた苦勞人で、駄弁を弄してバツをあはせる術てもよく心得てゐたので、たとへツアーリ皇帝の前へ出ても決して戸惑ひするやうなことは万々なかつ

た) いはばその、甚だ勝手なことを申すやうぢやが、どうか悪く思はんで頂きたい——かうしてわしは煙管パイプを持つてをるにはをるけれど、生憎と、これに、その、火をつけるべき物の持ちあはせがないのぢやが。』こんな風に持ちかけてみても、やはりなんの手応へもない。ただ醜面しこうらの一匹が、真赤に火のついた、燃えさしの木切れを取りあげて、まともに祖父の眉間へ突きつけたので、もし彼が体たいをかはさなかつたものなら、恐らく永久に片方の眼玉におさらばを告げなければならなかつたことだらう。空しく時刻ときのうつるのを見て、つひに彼は、この悪魔の身内がこちらの言ひ分を聴き入れようが入れまいが、兎にも角にも用件を切り出すより他はなかつた。と、醜面しこうらの化物たちが耳を ほしい、これあ叶

はん！ けろけろとあたりを見まはしながら祖父は嘆声をもらした。なんとばけものいふ妖怪どもだらう！ どいつもこいつも見られたつら面ぢやない。おつそろしい数の妖ウエーヂマ女が、まるで降誕祭の頃に降る雪のやうに、うじやうじやと集たかつて、それが定期市ヤールマルカへ出かけた令嬢パンノチカ方そのけに、デカデカと飾り立てて粧しこんでゐる。そして、そこにゐるほどの妖ウエーヂマ女といふ妖ウエーヂマ女が残らず、酔つぱらつたやうな恰好で、珍妙な悪魔の踊りををどつてゐるのだ。その又、おつそろしく埃りを立てをることと言つたら！ 一と目、その悪魔の身内どもが空高く宙を翔ける有様を見たならば、洗礼を受けた基督教徒は思はず顫へあがつたことだらう。また、犬のやうな鼻面の悪魔どもが、独逸人そつくりの細い脚で立つて、尻

尾をくるくる振りまはしながら、ちやうど、若い衆が美しい娘にするやうに、ウエーチマ妖女たちをとりまいてじやらついたり、樂師どもが太鼓を打つやうに、われとわが頬を打ち、角笛を吹くやうに鼻を鳴らしなどするのを見ては、すべてのおそろしさも打ち忘れてプツと噴飯ふきださずにはゐられなかつた。祖父の姿を見つけると、そいつらが犇々とこちらへ押しよせて来るのだ。豚のやうな、犬のやうな、山羊のやうな、のがん鶺鴒のやうな、馬のやうな、様々の鼻面が、いちどきにぬつと頸をのぼして、祖父の顔をペロペロと舐めまはしたものだ。その穢ならしさに祖父はペツと唾を吐いた。だが結局、彼は一同につかまへられて、長さがコノトープからバトウーリンまでの道程ほどもある大食卓にむかつて席につかせられ

た。うん、これあまんざらでもないぞ。祖父は、食卓のうへに並べられた豚肉や腸詰や、それから玉菜キャベツと一緒に微塵切りにした玉葱や、その他さまざまの美味うまさうな御馳走を見ると、心ひそかに眩やいた。なるほど、魔性の悪党どもが精進を守るわけはあるまいて。ところで御承知おき願はねばならぬことは、この祖父といふのがまた、至つて健啖家で、何かのにきらひなく、むしやむしや頬張る機会を逃す人ではなかつたことぢや。頗るつきの喰らひ抜けと来てゐたので、碌々はなしにも身を入れず、刻んだ豚脂ベーコンの入つた鉢と燻豚ハムとを引き寄せると、百姓が乾草を掻きよせる熊手とあまり大ききの違はないやうな肉フオーク叉をとりあげて、それでもつて一番重たさうな一きれ片を突き刺した。それに麵

麴を一　り取りそへて、やをら、口へ持つていったつもりだつたが、はて面妖な、それは自分の直ぐ脇にゐた奴の口へ入つてゐた。そしてすぐ耳もとで、どいつだか、ガツガツと、食卓ぢゆうに響きわたるやうな歯音を立てながら、口を動かしてゐるけはひが聞えるばかり。祖父の口へは何一つ入つちやゐない。そこで今度はまた別の片きれを取りあげたが、ちよつと唇に触つたと思つただけで、自分の咽喉へは通らなかつた。三度目もやはり同じやうにわきへ外それてしまつた。赫つと腹を立てた祖父は、怖ろしさも、自分が何者の手中に落ちてゐるかも忘れて、妖ウエーヂマ女どもどもに喰つてかかつた。『いつたい全体、汝うぬたちへロデの後裔ちすぢどもめは、このおれを嘲弄してけつかるのか！ たつた今、おれの哥薩克帽を返して

よこせばよし、さもないと汝^{うぬ}たちの豚面^{うなじ}を項の方へ向けて振ぢま
 げて呉れるぞ！」その言葉の終るのも待たずに、すべての妖怪ど
 もは齒を剥き出して、祖父の魂がぞつと慄へあがつたほど、物凄
 い笑ひ声をあげた。

「よござんす！」と妖^{ウエーチマ}女の一人が金切声で叫んだ。それは仲

間のうちのどいつより、きたない面をしてゐたから、多分、一番
 年^{としかさ}長のやつに違ひないと祖父は考へた。「帽子は返してあげる
 けれど、その前に妾たちと三度だけ 阿房^{ドウールニヤ}の手合せをしてか
 らでなきや駄目だよ。」

さてなんとしたものだらう？ 哥薩克ともある者が女^{あま}つこども

の仲間へ入つて 阿房^{ドウールニヤ} をやるなんて！ 祖父は飽くまで潔よ

しとしなかつたけれど、たうとうしまひに勝負をすることにきめた。そこで骨牌トランプが持ち出されたが、それは、祭司の娘が未来の花聾を占ふ時ぐらゐにしか用ゐないやうな、手垢だらけの薄ぎたない札だつた。

「さあ、よろしいかね！」と、例の妖女ウエーヂマが再び吠えるやうに言つた。「もしお前さんが一度でも勝負に勝てば、帽子はお前さんに返してあげるけれど、三度ともつづけて負けたら、お気の毒だが帽子だけではなしに、お前さんの命もいつしよに、こちらへ貰ひますよ！」

「札を配りやあがれ、毫碌婆あめ！　なんとでも、なるやうになるのぢや。」

そこで骨牌が配られた。祖父は自分の札を手に取つたが——ま
 つたく見るのも厭な、悪い手だ。まるで切札なんか一枚もなく、
 やつと並札なみの十が上々で、揃くつつき札ひとつないのに、妖女ウエーヂマの方
 では後からあとから一ピャチエリクばかり揃へやがる。たうとう負けに
 なつてしまつた！ 祖父が負けといふことにきまると同時に、四
 方八方から馬のやうな、犬のやうな、豚のやうな、さまざまな鳴
 き声で妖怪どもが阿房ドウレン、阿房ドウレン、阿房ネウレン！ とほざき立てた。
 「ええつ、汝うぬたち悪魔のみうちめ、とつとと消え失せやがればい
 いに！」指をあてて耳に蓋をしながら、祖父が呶鳴つた。そして
 心の中で さては妖女ウエーヂマ、いかさまをしをつたな、ぢやあ今
 度はひとつ俺が配つてやらう と考へた。そこで彼は牌を配つて、

切札を宣告した。自分の牌を見ると、素晴らしい手で、切札もある。最初のうちはこのうへもない上々の首尾で勝負が進んだ。ところが妖ウエーヂマ女メめ、又もや王牌入キングの二二一一ピャチエリクをならべをつた！祖父の手は切札ぞろひと来てゐる！碌々思案もせず、祖父は王牌キングの髭面に素早く切札を叩きつけた。

「おつと、どつこい！ それあ哥薩克らしくないやり方だよ！ いったいお前さん、なにで切りなさるのぢや？」

「なにで切るとはなんぢや？ いはずと知れた、切札で切つたのぢや！」

「ひよつとしたら、お前さんがたの方ではそれが切札なのかもしれないが、妾たちの方では、さうぢやないんだよ！」

見れば、なるほどそれは普通の牌だ。奇態なこともあるものだ！
 今度も負けになつてしまつた。そして妖怪どもは又しても声を張りあげて ドワーレン 阿房！ ドワーレン 阿房！ と喚き立てた。それがために卓子がガタビシ揺れて、骨牌の札が卓子の上で躍りあがつた。祖父は躍起になつて、いよいよ最後の、三回目の札を配つた。勝負は再び順調に進んだ。妖 ウエーチマ 女が又しても ピャチエリク 二二一一を揃へた。祖父はそれを殺しておいて、堆牌 やま から札を取ると、それがどれもこれも切札ばかりだ。「切札！」と叫んで彼は、その札が策 さく のやうに反りかへつたほど力まかせに卓子へ叩きつけた。相手は何にも言はず なみふだ に普通牌の八をその上へ重ねて置いた。

「いつたい何で殺さうつてんだ、この古狸め？」

ウエーヂマ
 妖女は自分の置いた牌ふだを取りあげた。と、その下にあるのは普通牌なみふだの六だった。

「ちえつ、悪魔め、誤魔化しやあがつて！」さう言つて祖父は腹立ちまぎれに、拳を振りあげて、力まかせに卓子をたたきつけた。だが、まだしも仕合はせなことには、妖女ウエーヂマの手が余り香ばしくなくて、祖父の手に今度はお誂へむきな揃くつつき札が出来た。そこで堆牌やまから札をめくりにかかったが、いやもう我慢も出来ないやうな、碌でもないものばかり起きてくるので、祖父はがっかりしてしまった。ところが堆牌やまがすっかりになつてしまった。彼は、もうかうなれば破れかぶれだとはかりに、六の普通牌なみふだを打つた。と、妖女ウエーヂマがそれを受け取つた。

「おやおや！ これあ又、いつたいどうしたといふのぢや？ うへつ！ なんだかこれあ、少しをかしいぞ！」

そこで祖父は自分の牌ふだをそつと卓子の下へ匿して十字を切つたと、どうだらう、持もち牌ふだは切札のA牌ポイントに王牌キングに兵牌ジャツクで、彼が前に打つたのは六ではなくて后牌クチェーンだつたのだ。

「ええ、なるほどおれは馬鹿ぢやつたわい！ 切札の王牌キング！ ど

うぢや！ 取つたか？ 猫の後裔すゑめ！ A牌ポイントはいらんか？ Aポ

イント
牌！ 兵牌ジャツク！ ……」

物凄い雷霆が鳴りはためいた。妖女ウエーチマはぢだんだ踏んだ。す

ると、どこからともなく、まともに祖父の顔をめがけて帽子が飛んで来た。

「いんにや、これだけぢやあ足りないぞ！」と、俄かに活氣づいた祖父は、帽子をかぶりながら、喚いた。「おれの駿馬を即刻この場へ出しをればよし、さもなければおれは、たとへこの穢らしい場所うぬで雷に撃たれやうとどうしようと、汝たちうぬに対つてあらたかな十字架で十字を切らずには措かぬぞ！」

そして今にも彼が手をあげようとした時、不意にすさまじい物音がして、祖父の面前へ骸骨の馬が現はれた。

「そら、これがお前さんの馬だよ！」

それを見ると、哀れな祖父は、たわいない稚な子のやうに、おいおいと声をあげて泣き出した。古馴染の愛馬に対する憐愍の情に堪へなかつたのぢや！『どんな馬でも一頭、手前たちの巢窟あなか

ら選り出してくれえ！』悪魔が長い鞭を一と振りすると、電光石火の早はやわざ技で一頭の馬が祖父を背に乗せてパツと跳ねあがつた。同時に祖父は飛鳥のやうに上空へと舞ひあがつた。

だが、途中でその馬が、制する声も手綱さばきも聴かばこそ、崩穴がけや沼地のうへを飛び越え跳ね越えする時には、祖父は生きた心地もなかつたといふ。到るところ、話に聞いただけでも、ぞつとするやうな難所ばかりを通つた。ふと、足もとを見ると、更に驚ろいた。そこは絶壁だ！ 怖ろしい懸崖だ！ 然も魔性の生物は一向お構ひなしに、まともに飛び下りるのだ。祖父はしつかり身を支へようとしたが、間にあはなかつた。彼のからだは木の株や土くれの上を翻筋斗もんどりうつて、まつさかさまに断崖を転げ落ちて

行つた。そして谷底に達すると共に、いやといふほど地面へ叩きつけられたため、祖父はハタと息の根が停つてしまつたやうに思つた。少くともその刹那、自分がいつたいどうなつたのか、まるで記憶がなかつたといふ。やうやく正氣に返つてあたりを見まはした時には、もう夜が明けはなれてをり、あたりの様子にどうやら見憶えがあるやうに思つたのも道理、祖父は他ならぬ我が家の屋の棟に投げ出されてゐたのぢや。

地面へ降り立つと、祖父は十字を切つた。なんといふ悪魔の所業ぢやらう！ 飛んでもない、なんといふ不思議な目に遭つたことぢやらう！ 両の手を見れば、すっかり血だらけ、水を張つた桶を覗いて見れば、顔も同じやうに血だらけなのぢや。子供たち

を吃驚させるでもないと思つて、丁寧^{テイネイ}に顔や手を洗つて、祖父はこつそり家のなかへ入つていつたが、見ると、こちらへ背を向けて後ずさりをしながら子供たちが、怖ろしさうにむかふを指さして『あれ！ あれ！ お母^{つか}さんが、きちがひみたいに踊つてるよ！』といふ。なるほど、見れば、麻^あ梳^さを前にして、紡^{つむ}錘^むを握つた女房が、ぼうつとして腰掛に坐つたまま、踊つてをるのぢや。

祖父はそつとその手を掴んで、妻を揺りさました。『これ、今歸つたぞ！ お前どうかしやせんのかい？』祖父のつれあひは長いあひだ、眼を瞠^もつたまま、きよとんとしてゐたが、やつと良人の姿に気がつくつと、煖^べ炉^{ちか}が家のなかぢゆうを歩きまはつて鋤^{くわ}や壺^かや盥^{そと}を戸外へ追ひ出したのだの……なんだのと、さつぱり辻褄のあは

ぬ夢を見てゐたのだと話した。『なあに、』と、祖父が言つた。

『お前は夢に見ただけぢやが、おらは現つて酷い目に会つたわい。一度この家の^{うち}祓ひをせにやなるまいが、今は愚図々々しちやゐられんのぢや。』さう言つて、祖父はちよつと休んだだけで、馬の都合をつけると、今度こそ夜を日について、決して道草などは食はずに、目的地へと直行して、国書を親しく女帝の闕下に捧呈したのぢや。宮中で目撃した様々の奇らしい事柄は、その後久しいあひだ、祖父の語り草となつた。彼が参内した御所の棟の高かつたことといへば、普通の家を^{とを}十も上へ積みあげても、まだ足りないほどだつたこと、御座所はここかとうかがつたが違つてゐる、次ぎの間かと思つたがそこでもない、三番目も四番目もまださう

でなかつたが、やつと五番目の御間へとほると、金色燦然たる宝冠を戴き、真まつぎら新あらたな鼠色の長スキートカ上衣ウエカミに、赤い長靴を履かれた女帝が、御座所で黄金いろの煮ガルシユカ団子ダマシロを召しあがつておいでになつたこと、女帝が侍臣に命じて帽子に入るだけの*青紙幣シーニツツアを彼につかはされたこと等々……枚挙に暇もないくらゐ！　だが、自分が悪魔を相手に演じた、くだん的一幕については、祖父はけろりと忘れてしまつて、もし誰かがその話を持ち出すやうなことがあつても、てんでそんなことには関係がないやうな顔をして、いつかな、口をあかなかつたので、その一部始終を話させるのは並大抵のことではなかつた。それはさて、そのことのある後、さつそく、家を祓ひ潔めなかつた神罰でもあらうか、毎年きまつて、そ

の同じころになると、不思議なことに、つれあひが自然ひとりに踊りだすのぢやつた。何をしてゐても、むずむずと脚が勝手に動き出して、どうしても、すぐさま、しやがみ踊りをおつ始めずにはゐられないのぢやつた。

シーニツツア
青紙幣
ルーブリ
五留紙幣の異名。

——一八三一年——

青空文庫情報

底本：「デイカーニカ近郷夜話 前篇」岩波文庫、岩波書店

1937（昭和12）年7月30日第1刷発行

1994（平成6）年10月6日第8刷発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本の中扉には「デイカーニカ近郷夜話 前篇」の表記の左下に「蜜蜂飼ルードウイ・パニコ著はすところの物語集」と小書きされています。

※「灯」と「燈」は新旧関係にあるので「灯」に書き替えるべき

ですが、底本で混在していましたので底本通りにしました。

入力：oterudon

校正：伊藤時也

2009年8月6日作成

2014年6月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ディカーニカ近郷夜話 前篇

VECHERA NA HUTORE BLIZ DIKANIKI

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 紛失した国書（×××寺の役僧が語った実話）
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>